

第3講：古い道と新しい道の間

おやさと研究所研究員
辻井 正和 Masakazu Tsujii

はじめに

戦前と戦後の連続性、および高度経済成長期以前と以後の不連続性という観点から天理教について見てみたい。

おさづけ拝載者などの戦後の教勢統計の推移を見ると、1976年の教祖90年祭の後から減少傾向が続き、均してみれば、ここ30年以上にわたって前年比マイナス5%で推移している。高度成長以前と以後の推移に不連続性が見られる。しかし、行事や組織には大きな変化は見られず、戦前と戦後の連続性の中で形成されたものが今も続いているように見える。

天理教における戦前と戦後の連続性

行事においては、こどもおぢがえりのように戦後始まったものもあるが、ひのきしんデーやにをいがけデーは昭和7年からである。文書による心定め提出も昭和8年の第4回教義講習会において、松村吉太郎が「各名称から一々紙に書いて、その精神定めを神様にお供えて帰ってもらいたいのであります」と述べた時からのように思われる。

ハッピーについても、背文字を天理教に統一し、襟に直属教会名と所属教会名を入れるようになったのは『天理教事典』によれば昭和2年である。天理教校が、ハッピーを制服と定めたのは昭和19年であり、それが戦後も続いている。教会が大教会と分教会の2階級になったのは「革新」の最中の昭和16年である。

「復元」についても、復元という用語が用いられたのは昭和20年10月の教義講習会からであるが、復元は昭和2年の「おさしづ」公刊、昭和3年のおふでさき公刊の頃から始まっている。

「三信条」の構造

昭和32年から、二代真柱は、「三信条」（神一条の精神・ひのきしんの態度・一手一つの和）を提唱しているが、幡鎌一弘によれば、その原型は昭和17年にあるという。ここでは、「構造」という観点から三信条を見てみよう。

レヴィ＝ストロースによれば、構造とは「要素と要素の関係からなる全体であって、この関係は、一連の変形過程（置換）を通じて不変の特性を保持する」ようなものである。例えば、原子は、原子核のまわりを電子が回っているが、原子核を太陽に、電子を惑星に置き換えれば太陽系になる。原子と太陽系は別のものであるが、構造は同じであるといえる。

三信条は、ようぼくに対する要請であるが、昭和32年の日本短波放送での二代真柱のお話の中の説明によれば、

親神様の思召に徹底して判断すること

欲を忘れた、忘我と言いますか、その上に行動すること

持場々々を一つの心でつながること

である。ところで、高度経済成長期に「会社人間」という言葉があったが、会社人間とは、

会社の方針にもとづいて

家庭を顧みず会社のために

社員一丸

となって働く人々である。

それぞれの要素を置き換えれば（親神一会社など）、三信条と同じ構造になっている。こうした日本人の企業意識が見られる理

由の一つに、第一次世界大戦以来の経営家族主義的なイデオロギーや、第二次世界大戦中における「労使一体」「労働報国」を理念とした産業報国運動の展開があげられる（『日本大百科全書』）。昭和12年、当時の文部省は『国体の本義』という書物を編纂しているが、そのなかで「一大家族国家として、億兆一心／聖旨（天皇の思召）を奉体して／克く忠孝の美德を発揮する」のが国体の精華であると述べられている。ここには、会社人間と同じ構造が見られる。

「一手一つ」と「和」と持場

「一手一つ」について二代真柱は「同じ事をするというのではなくて、持場々々を一つの心でつながるという事」であると述べ、身体の器官である目や口や耳などにたとえ、「それへが、それへの立場をはっきりと勤めてくれまする事によって」人間が息災に行動できると述べている。

ところで、「一手一つの和」に含まれる「和」は原典には見られない言葉であるが、『国体の本義』には、「我が国の和は、理性から出発し、互に独立した平等な個人の機械的な協調ではなく、全体の中に分を以て存在し、この分に応ずる行を通じてよく一体を保つところの大和である。…各々その特性をもち、互に相違しながら、而もその特性即ち分を通じてよく本質を現じ、以て一如の世界に和するのである」と説明している。一手一つの説明と同じような構造になっている。

このように構造という観点からすると、三信条は会社人間や戦前の日本国民への要請と同じ構造を持っている。この構造は、戦前から高度成長期までの日本人には馴染み深いものであったが、高度成長期の終りとともに崩壊していった。教勢の低迷が高度成長の終りと同時に始まっていることからすると、この不連続性をどのように受け止めるのかは大きな課題である。

「おさしづ」の「古い道」と「新しい道」

よく「古き道ありて新しき道」と言われる。「おさしづ」にも、全く同じではないが、ほぼ同じような表現がある。しかし、「おさしづ」の「新しい道」の用例を見ると、単に時間的な新旧を意味しているのではない。

「新しい道」の初出は、明治21年5月6日の「新しき道もある、古き道もある」である。このおさしづには、その前後に繰返し「世界の道」が現われる。その世界の道に対して「神の道五十年道」「無い道を付け来たる道」などの言葉も見られる。このおさしづは、東京において教会本部の設置が認可された明治21年4月10日から1ヶ月ほどの時期に出されている。

「おさしづ」の「新しい道」は、「古い道」との対比において、質的な違いを含意している。平成の現在においても「新しき道もある、古き道もある」と言えるであろう。

おわりに

二代真柱は『おふでさき概説』において、「これ迄の先輩の歩みを習うと同時に、それが教祖の教えられた本筋に添っていないものならば、今からでも遅くはないから改めて貰いたい」と述べられているが、教会本部が設置された明治21年から現在に至るまでの間に形成されたものについて改めて見直すことをしなければ、30年ほど前からの教勢の推移に対応することは難しいのではないかと考えさせられるのである。